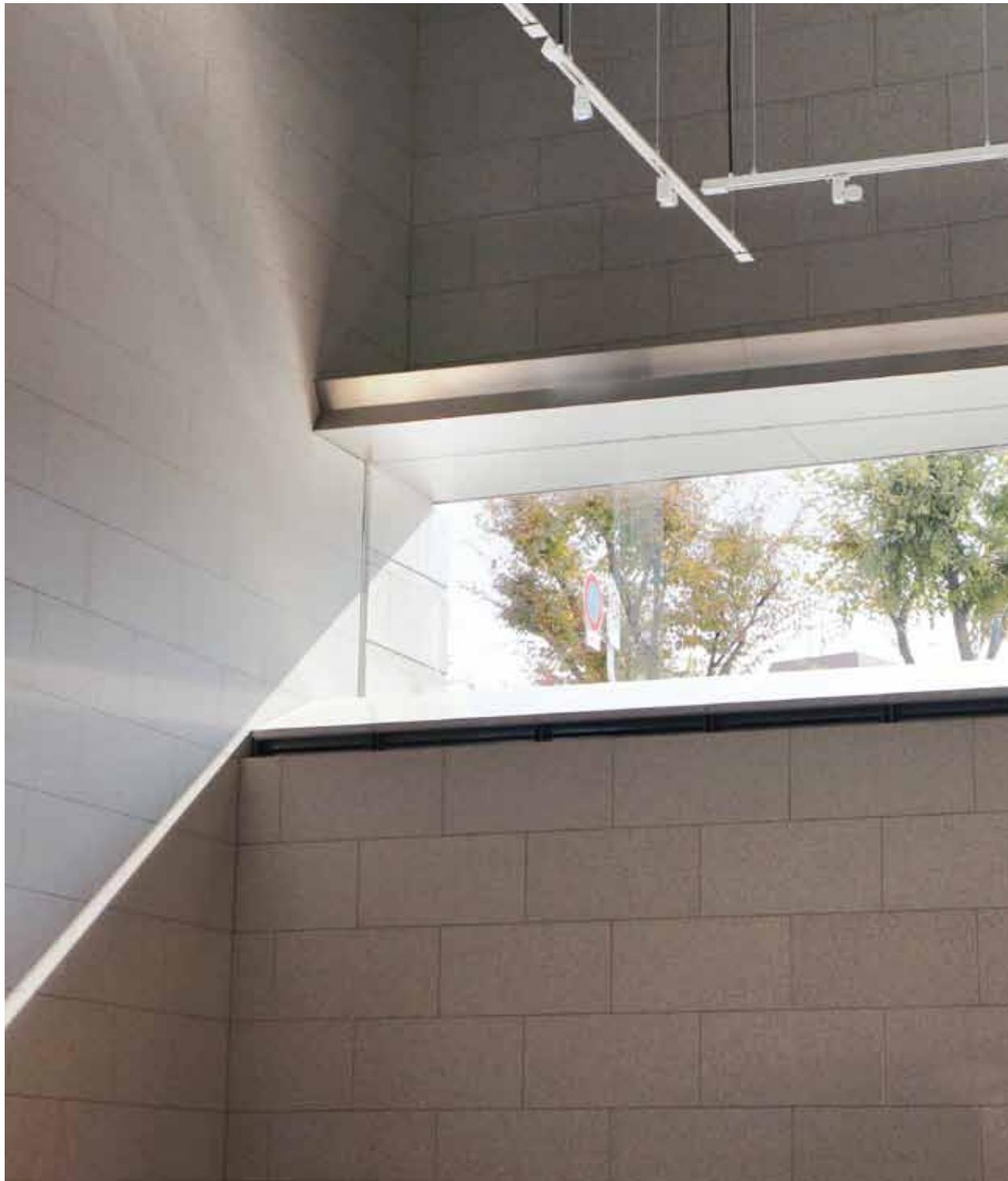


123

2018 WINTER

美術館NEWS



「美術館の紹介」Vol. 23

街路にまっすぐ沿う細長いガラス窓。
そこから館内をのぞきこむと、
屋内広場を見渡せる眺望が得られる。
窓ガラスが館内外を水平方向につなぎ、
そして屋内広場が地下から2階を垂直方向につなぐことで、
建築の堅牢さとは対照的な開放感をもたらされる。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

小圃千浦 お ば た ち う ら —カリフォルニアに生きる

廣瀬 就久(主任学芸員)

岡山県に生まれ、あるいは岡山県に滞在しながら、これまで作品が紹介されていなかった作家を紹介する「岡山の作家☆再発見」は、今回が8回目となります。

小圃千浦(1885-1975)は現在の井原市に生まれました。本名は佐藤藏六です。1890年には、仙台に住む美術教師、兄六一ろくいちの養子になります。それから絵画を学び、99年には家出をして上京しました。そして頓田丹むらたたん陵(1872-1940)らの指導を受けます。この頃から千浦と号しました。1900年には、日本画研究団体である美術研精会に入会します。そして翌01年に、日本美術院連合絵画共進会で、《初春》が銅牌を受賞しました。その後03年に渡米し、シアトル経由でサンフランシスコに到着します。

学校に通いつつ、米国人の家庭で住み込むスクールボーイを務めて、邦字紙『日米新聞』と『新世界』の挿絵画家になりました。06年4月18日に、サンフランシスコ地震を経験します。震災後に水彩画を描いていますが、《震災後の日本町、カリフォルニア通り近く、1906年5月18日朝》など5点を展示します。12年に小橋幸子と結婚し、15年から27年まで『ジャパン』誌の挿絵画家を勤めました。

21年には親友、日比松三郎(1886-1947)年とともに「東西芸術協会」を創立し、東西芸術協会展を開催しました。27年にはヨセミテ溪谷を旅行して、翌年サンフランシスコの東西画廊で初個展を開きます。この年、養父六一の急逝で日本に戻り、カリフォルニアの風景を描いた35点の色彩木版画集《世界風景連作》を、監修して出版しました。《山上の湖(ハイ・シエラのバイスン湖)》が評価され、29年には宮城県図書館で個展を開催しました。

30年に再渡米し、カリフォルニア大学バークレー校で「小圃千浦のカリフォルニア風景展」を開催します。31年に《北国の娘》をサンフランシスコ美術協会展で発表し、32年からカリフォルニア大学バークレー校美

《グランドキャニオン》水彩・絹 1940年 アムバー アンド リチャード・サカイ コレクション





《夕暮れの給水塔》墨、着彩、雲母・絹 1943年 サンフランシスコ美術館

術科に勤めます。この頃から毎年大学での指導の傍ら、個展やグループ展で作品を発表しました。

太平洋戦争中、小圃は不自由な人生を歩みます。カリフォルニア州の日系人は、42年に強制的に移住することとなり、バークレーからサンブルーノ、そしてタンフォランの仮収容所に移りました。そこでも小圃は、美術と教育への情熱は冷めず、タンフォランで美術学校を開設して、美術の喜び、ひいては生きることの喜びを、所内の人々に伝えました。のちにユタ州トバズの戦時転住センターに送られ、そのセンターでもトバズ美術学校を開設して、校長になります。移動期と収容期に、墨による素描を残しています。43年に解放され、戦後はバークレーに戻り、カリフォルニア大学バークレー校美術科に復職します。48年には助教授となりました。

52年に移民国籍法が制定されて、アジア系は除外されなくなり、小圃は市民権を申請します。54年には米国民に帰化しました。そして同年に、カリフォルニア大学バークレー校を退職し、名誉教授となります。54年から69年まで、毎年春と夏に、団体を引率して日本に旅行しました。65年に勲五等瑞宝章を受章しています。75年にバークレーで亡くなりました。

日本で小圃は知られざる画家です。作品は版画のほか、ほとんど知られていません。米国では、没後間もない1977年に、オークランド美術館で個展が開催されました。当館に巡回する本展“Chiura Obata : An American Modern”は、米国では約40年ぶりです。日本では没後最初の個展です。遺族と研究者(王士圃氏、カリフォルニア州マーセド校教授)の熱意によるものです。

本展はカリフォルニア大学サンタバーバラ校付属美術館(サンタバーバラ)とユタ美術館(ソルトレイクシティ)で行われました。そして小圃の出生地、岡山県の当館に巡回します。日本国内では当館だけの開催です。終了後、クロッカー美術館(サクラメント、カリフォルニア州)とスミソニアン・アメリカ美術館(ワシントンD.C.)で開催されます。テラ・アメリカ美術基金の寛大な助成により本展が実現しました。

小圃は、当館で作品を所蔵する国吉康雄(1889-1953)のように、日米二国のなかで激動の人生を歩んだ画家でした。二人とも米国で亡くなっていますが、国吉は終生日本人であり、長命であった小圃は帰化しました。国吉は油彩画家および版画家として米国で評価されましたが、小圃の場合、今回展示している日本画、水墨画、水彩画、木版画そして素描を見ると、絵画の素材についても、主題の選定についても、東西の美術が混じり合っています。約140点の作品を紹介しますが、どのような考えで作品を制作していたのか、想像すると面白いでしょう。

形山コレクション 茶碗 掌の銀河

福富 幸(主任学芸員)

あまり知られていない県内の個人や企業が所有する作品を紹介する企画展「おかやまアートコレクション探訪」—シリーズ6回目となる本展では、日本の近現代陶芸において著名な作家の「茶碗」だけを集めた個人コレクションを紹介します。

コレクターである形山氏は、美術商を介して岡部嶺男の《絵志野茶碗》に出会い、その力強く毅然とした竹まいの一碗に魅せられました。茶碗に興味を覚えた形山氏は、茶道の道具として設えるためではなく、わかりやすく陶芸界を代表する人間国宝、それに匹敵する優れた作家の「茶碗」を集めてみようかと、美術商と二人三脚でコレクションづくりを始めました。最初は3年くらいで終わるかなと思っていたそうですが、自身の琴線に触れる「いいな」「面白いな」と気に入った器を求めていつの間にか10年が過ぎました。無形文化財を保護する制度が始まった昭和30(1955)年から今日まで、のべ22種38名の技法と陶芸家(荒川豊藏は「志野」と「瀬戸黒」)が指定を受けていますが、それら保持者の作品に岡部嶺男や加藤唐九郎、川喜田半泥子、北大路魯山人、河井寛次郎、板谷波山、加守田章二といった近代陶芸界に名だたる作家の一碗がそろってきたことから、一度広く公開する機会を持ってないかと相談がありました。

茶碗は一服の茶を頂く、ただそれだけの器です。然りながらこの小さな器は大宇宙にもなぞられます。茶は亭主と客とがさまざまな思いを抱きながらそこに存在する時間や空間を共有し、五感を通してそこに集う人々、設えられた道具類との出会いに興ずるものです。「一期一会」の言葉のとおり同じ時間、同じ出会いは二度と訪れない。鋭敏に神経を研ぎ澄ませ、頂く一碗に集中する時、なにかそこに深遠な世界を感じることができるのではないのでしょうか。茶の湯を嗜わずとも、陶芸家ならば誰もが魅力的な一碗を、自己を投影した宇宙を創り出したいと思い、またそうした茶碗を掌に取り、その世界を味わってみたいと望む人も多いのではないのでしょうか。

コレクションは、天目、瀬戸黒、萩、備前、色絵、染付、青磁、金彩など作家の数だけ多彩を極め、小さいながらも一碗一碗に各作家の個性が宿ります。陶芸家たちが織りなす美しい銀河にひととき遊んでみてはいかがでしょうか。

1. 岡部嶺男《絵志野茶碗》/2. 山田山庵《巫山峡 三峽之内 霧の澤》/3. 川喜田半泥子《自作 高師の浜 八十賀百碗鑑百碗之内》/4. 瀬戸毅己《曜変天目》(部分)/5. 加守田章二《茶碗》(部分)/6. 清水卯一《鉄燿茶盃》(部分)

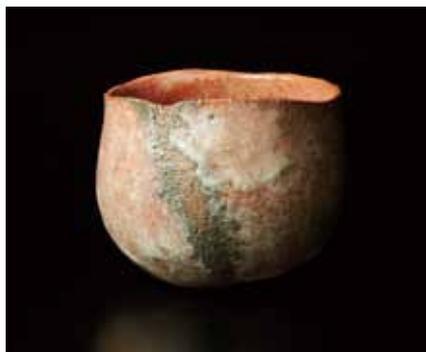
【岡山の美術 特別展示】

おかやまアートコレクション探訪VI「形山コレクション 茶碗 掌の銀河」

(会期:2019年1月18日~3月10日)



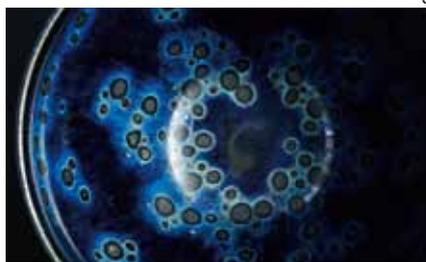
1



2



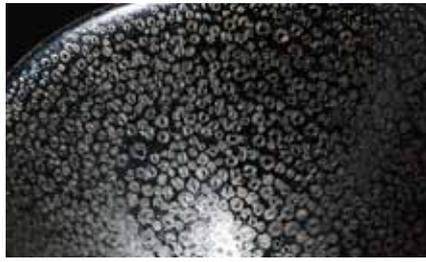
3



4



5



6

画学生の反乱—19世紀後半のロシアと日本

橋村 直樹(学芸員)



イワン・クラムスコイ《忘れえぬ女》1883年 油彩・キャンヴァス © The State Tretyakov Gallery

モスクワにある国立トレチャコフ美術館は、実業家で篤志家のパーヴェル・トレチャコフ(1832-1898)によって創設されたロシア美術の殿堂で、中世のロシア・イコンから19世紀のロシア・リアリズム絵画、さらには20世紀のロシア・アヴァンギャルドなどの現代美術にまでおよぼ約20万点を収蔵している。同館の誇るロシア美術コレクションの中から、クラムスコイやシーシキン、レーピンといった19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍した画家たちの作品72点を紹介する展覧会「国立トレチャコフ美術館所蔵 ロマンティック・ロシア」が、先月23日より渋谷のBunkamuraザ・ミュージアムで始まった(2019年1月27日まで)。同展は東京を皮切りに全国4会場(東京・岡山・山形・愛媛)を巡回するもので、当館でも来春開催が予定されている。

檜の木の深い森や草原が広がる雄大な自然の姿、ロシア正教の独特な聖堂建築のある村や町の風景、あるいは民衆の日常生活の様子などをありのままに描いたロシア・リアリズム絵画の優品が並ぶ同展において、とりわけ観る者を魅了するのは、展覧会図録や広報印刷物のメインビジュアルとなっている《忘れえぬ女》であろう。一度目にしたらまさに「忘れえぬ」印象を受けるこの女性の肖像を描いたのは、19世紀後半のロシア絵画を牽引したイワン・クラムスコイ(1837-1887)である。クラムスコイは、ロシア各地に美術展を移動巡回させて民衆を啓蒙しようと1870年に結成された反アカデミーの移動展覧会協会(移動派)の理論的・精神的指導者であった。また彼は、移動派の結成に遡ること7年前の1863年にサンクトペテルブルク美術アカデミーで起きた

「14人の反乱」の首謀者でもあった。これはクラムスコイを中心とする14人の優秀な画学生が、アカデミーの卒業制作コンクールにおいて、自由に主題を選んで制作することを要求するも却下されたため、連れ立って退学するに至ったという事件である。アカデミーに離反した画学生たちは、クラムスコイをリーダーとして芸術家協同組合を組織し、共同生活を送りながら受注による制作活動や教育活動を続けた。後にロシア・リアリズム絵画最大の巨匠となるレーピンも美術アカデミーに通っていた学生時代、ここに参加してクラムスコイから指導を受けている。

ところで、優秀な画学生が一齐退学し、独自の芸術家団体を組織したという19世紀後半のロシア美術界におけるこの出来事は、明治日本における十一字会の結成を思い起こさせる。日本初の官立美術学校である工部美術学校の画学生であった浅井忠や小山正太郎、松岡寿らは、明治11(1878)年、イタリア人教師フォンタネージの後任フェレッティへの不満から教師交替を嘆願するも叶わず、連袂退学して十一字会を結成した。同会は小山によって私塾として引き継がれて不同舎となり、後に日本洋画界で活躍することになる満谷国四郎や鹿子木孟郎、中村不折らを輩出している。

すでに18世紀から西欧化が進み、美術アカデミーが創設されて100年以上経っていたロシアと、西欧化が始まったばかりで官立美術学校ができてすぐの日本とでは状況は大きく異なるが、体制に抵抗してでも自らの信じる芸術理念を貫こうとした気概ある若い画家たちがその後の両国の美術界を支えることになるという共通点があったのである。

新収蔵品紹介

File 11

高松明日香《海からの風》
古川 文子(学芸員)



高松明日香《海からの風》2013年 アクリル絵具・キャンバス 本館蔵

水平線を望む丘の上から砂浜へと向かう6人の後姿—画面を包む青みがかった中間色のトーンは、遠い記憶の中に迷い込んだような感覚を与える。人物の動きや身体の特徴をさりげなく捉えた筆あとに導かれ、切り取られたシーンのあと先へと想像が広がる。

香川県高松市出身の高松明日香(1984-)は、倉敷芸術科学大学での勤務に伴い、岡山県にも活動の場を拡げ、2011年度から毎年、岡山県新進美術家育成「I氏賞」最終選考のための作品展に名を連ねた。青空と雪山に向かって跳ぶ鹿の群れを描いた《ジャンプしてSAYONARA》(2011)、身近な川沿いの風景とクローズアップした部分を大小3枚組で構成した《ランニングポイント》(2012)と、モチーフや構図が変わっても、ひと目で彼女の作とわかる絵画は、展示会場でも印象深い存在であった。本作は三度目の2013年度に、第7回「I氏賞」大賞を受賞した時の出品作である。「人という存在からもたらされる印象は非常に壮大で、それは目に見える部分であったり、そうではなかったりします。今まで接してきたさまざまなものから、私が受けた印象を絵画にしました。」(「第7回I氏賞選考作品展」図録より)目に見えない部分にも配慮しつつ、控えめな筆致と色調

で彼女が描き出す「印象」は、自ら語り過ぎることなく見る側の意識にはたらきかけてくる。今後も作品の前に立つ人それぞれの心の中に、新たな物語が生まれ続けることだろう。

岡山県立美術館では毎年「I氏賞」受賞者の作品購入を進めている。開館30周年記念展「県美コネクション」でも、大西伸明《mini kupa》、小野耕石《Hundred Layers of Colors》、児玉知己《温かい絵画》、下道基之《Dusk/Dawn Thira/Siem Reap》等、これまでに本館蔵となった作品をご覧いただいた。昨年度新たにコレクションに加わったのが、本作を含む高松の作品と「I氏賞受賞作家展 ダイアログdialogue」でご紹介した原彰子の作品である。また、今年度の第12回「I氏賞」についても、このほど一次選考通過者が発表され、年明けの「選考作品展」には、新進美術家11名の作品が並ぶ。(会場:岡山県天神山文化プラザ 会期:2019年1月29日~2月10日)若い作家たちの瑞々しい表現に触れ、その後の展開にも立ち会える場としての「I氏賞」を多くの方に楽しんでいただきたい。

※作者名について、これまで受賞時の本名である「高松明日香」としていましたが、近年の個展等での作家自身の表記に従い「高松明日香」に統一します。

展覧会スケジュール

1月
January

12月12日|水|—1月14日|月・祝|

【岡山の美術展】黒住章堂

黒住章堂(1877-1943)は現在の岡山市北区に生まれた四条派の日本画家です。彼は名声を追わず、全国の寺社再興に尽力しました。本展では、近年章堂の名が注目されるきっかけとなった畢生の大作である和歌山市の寂光院襖絵44枚を中心に、岡山県内の作品も交えて、章堂の画業をご紹介します。

公式ホームページでは、展覧会で行われるギャラリートークやイベントの最新情報を随時公開中。

www.okayama-kenbi.info

1月18日|金|—2月24日|日|

【特別展】

秀桜基金留学賞の10年、そして「今」

美術作家・高橋秀、布貼り絵作家・藤田桜夫妻が基金を設立し、日本の未来を担う若い作家に海外留学のチャンスを与えるために設けた「秀桜基金留学賞」は、昨年で10回目で幕を閉じました。これまでの受賞作家30人の作品を一堂に展示し、その成果を紹介します。

1月19日|土| 11:00~15:30

W S 呈茶席

加藤唐九郎や荒山豊蔵ら桃里會メンバーの茶碗を楽しむ呈茶席

参加費 500円 (先着70名)※申込不要

1月19日|土| 14:00~15:30

記念講演会 「小圃千浦の画業について」

講師 王士圃(Wang Shi-Pu)氏

(カリフォルニア大学マーセド校教授 本展企画者)

会場 2階ホールのち2階展示室(先着210名)

※逐次通訳付き、申込不要、要観覧券

2月
February

1月18日|金|—3月10日|日|

【岡山の美術展】

おかやまアートコレクション探訪Ⅵ

—形山コレクション— 茶碗 掌の銀河

陶芸家の名だたる作家による魅力的な茶碗約80点を、県内のプライベートコレクションからご紹介します。

1月18日|金|—3月10日|日|

【岡山の美術展】

小圃千浦 カリフォルニアに生きる

日本画の技法でアメリカの壮大な景色を描き現地で活躍した小圃千浦は、1885年井原市に生まれました。1903年に渡米して32年にはカリフォルニア大学バークレー校美術科講師になり、太平洋戦争中はタンフォランとトバズに収容され、収容所内で美術学校を開校します。戦後はバークレー校に復職し、75年に同地で死去しました。このたび美術館での個展が初めて米国で開催されます。本展はこの展覧会の巡回展です。

2月24日|日| 11:00~15:30

W S 呈茶席

注目の現代作家の茶碗でモダンに楽しむ呈茶席

参加費 500円 (先着70名)※申込不要

3月
March

3月15日|金|—4月21日|日|

【特別展】

山陽新聞創刊140周年・

岡山県立美術館開館30周年

江戸の奇跡・明治の輝き

—日本絵画の200年

明治維新を挟んだ江戸時代後期と明治時代の200年は、日本絵画史においても大きく変動した時期です。画風が多岐にわたり、画家を応援する支持層も拡大し、大衆化して驚くばかりの変貌を遂げました。第1部では、池大雅・円山応挙・長澤芦雪・伊藤若冲・司馬江漢ら江戸後期のトップランナーたち、第2部では狩野芳崖・橋本雅邦・横山大観・下村観山・菱田春草ら激動の明治にあってひと際光彩放った日本画家たちの作品群を展覧します。

3月2日|土| 11:00~15:30

W S 呈茶席

金重有邦「茶碗の話で一服」呈茶席

参加費 500円 (先着70名)※申込不要

芦雪とクレール

守安 収

去る10月16日、遅い夏休みをとって妻とチューリッヒのリートベルグ美術館を訪れました。開催中の「長沢芦雪展」を観るためです。無量寺の襖絵等の代表作、また未見の作品も日本やアメリカから集い充実した内容に仕上がっていました。岡山からも2点の出品。企画者はコロンビア大学教授のマシューさん。彼が大学院生であった頃からの顔馴染みですが、思いがけなく会場でバッタリ対面。館内レストランでの昼食は、同じく来館していたハーバード大学美術館のレイチェルさん、ボローニャ大学のニーノさんも一緒です。外見はもちろん、国籍の異なる5人が同じテーブルで食事をしながら語り合う楽しさはまた格別。美術は世界共通の言語ですが、会話は日本語オンリー。妻によれば、私の岡山弁が一番へたな日本語であるとのこと。確かに彼らは流暢にきちんとしゃべります。すみません。▼今回のスイス行のもう一つの目的は、2005年創設のパウル・クレールセンターへ赴くこと。浦上玉堂を研究対象とする私はクレール好きでもあります。30年ぶりのベルンの街並みは変わらず美しく、駅前からバスで20分くらいの広々とした高台に建つセンターをゆっくり観覧、散策し、満喫しました。途中、子供たちへのトークがセンターのスタッフによって何か所かで催されており、日本人学校の生徒たちもおとなしく聞き入っていました。ふだんならもっと活発にやりとりしたら良いのと思うところですが、クレールを前にしてはしょうがないかな。帰国後は、ミュージアムショップで購入したプリント「忘れられぬ天使(1939年作)」を額装して館長室に掛け、一人悦に入っています。美術は幸せを呼びますね。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
www.okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

三井麻央

当館では2018年の終わりに黒住章堂展、2019年の始まりに小圃千浦展を開催します。ふたりはこれまで世に知られることの少なかった岡山の画家。黒住展の襖絵は近年和歌山市の寺院から発見されたもので、新年を迎えるのにぴったりの絢爛たる華やかさをもちます。一方の小圃は黒住と同じ岡山に生まれ生年も7年しか変わらないものの、戦前から戦後にかけてのアメリカで、黒住とは全く異なる画家人生を送ります(2, 3頁参照)。しかし奇遇にもふたりは、芸術の力で周囲の人々を苦境から救ったという共通点をもちました。見る者に強く訴える作品の数々をぜひお楽しみに。